

誰が苑そのの 梅の花そも ひさかたの 清き月夜つくよに ここだ散り来る

作者未詳 (巻十・二二二五)

まだまだ寒い日が続
いていますが、暦の上
では立春を過ぎ、県内
でもそろそろ梅が咲き
始める時期になりまし
た。

『万葉集』では、秋
に次いで多く詠まれた
植物が梅でした。原産
国である中国からもた
らされた植物で、飛鳥
時代の万葉歌には登場
しません。奈良時代

には、元号「令和」ゆ
かりの梅花宴なども開
かれ、盛んに歌に詠ま
れたことで知られま
す。降りくる雪と見ま
がうなど、中国詩文の
影響を受けた表現も多
くみられ、詩歌の世界
では白梅が愛されてい
た様子がかがえま
す。

この歌は、『万葉集』
中に約120首ある梅

やまと 万葉がたり

の歌の中でも、数少な
い夜の梅を詠んだ歌で
す。梅は当時まだ希少
な外来植物で、主に貴
族の邸宅などに植えら
れていたといわれま
す。「ひさかたの」は
本来「天」などを導く
枕詞ですが、ここでは
省略されて「天」その
ものを指すとみられて
います。

いた梅だろうかと、と、
凍てつくような夜に天
上の月に照らされなが
ら舞い来る梅の花びら
をうっとり眺めてい
る、そんな風流な人物
像が浮かんできます。
作者名が記されてい
ない歌は、後世の和歌
集と同様に身分の低い
人物の作だという見方
もありますが、この歌
のように、『万葉集』
では高い身分にあると
みられる人物の歌で
も、個人名を記さない
場合が多々あります。
この歌が載せられた

「詠」この庭の梅の花だろう。ひさかたの
清らかな月夜に、たくさん散って来ることよ。

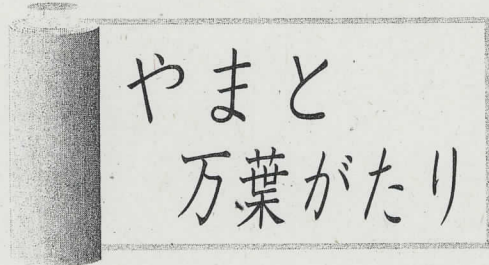
『万葉集』巻十は、巻
八とともに四季で分類
された特徴的な巻で、
四季分類は平安時代以
降の和歌集の規範と
もなりました。四季そ
れぞれをさらに雑歌・
相聞と分類する趣向
で、この歌は「冬雑歌」
に分類され「詠花」と
題されています。「詠
——」という題もまた、
中国の詠物詩の影響を
受けたものでした。
(県立万葉文化館・井
上さやか)

あしひきの 八つ峰の椿 つらつらに 見とも飽かめや 植ゑてける君

日差しに春を感じる季節になりました。皆様のお近くの椿はそろそろ咲いているでしょうか。

椿は日本原産の植物として知られます。真冬でも光沢のある濃緑色の厚葉が目を引き、早春に花を咲かせることから、古くから好まれてきました。

『万葉集』には椿を詠んだ歌が9首あり、「巨勢山の つらつら様のお近くの椿はそろそろ咲いているでしょうか。」(坂門人足 巻一・五四)という歌はとくに有名です。701年の持統太上天皇の紀伊行幸の際に詠まれた歌で、「つらつら」という同じ音の反復が特徴的です。第二句の「つらつら」は椿の木が連



なっているようすを表現しており、第三句の「つらつら」は、つくづく、という意味のことばです。同じく「つらつら」と表現する大伴家持の歌は、人足の歌を踏まえて詠んだことが明らかです。

家持が757年の春に大原真人(今城邸)に招かれたとき、庭に咲いていた椿を見てこの

(大伴家持 卷二十・四四八)

歌を詠んだ、と『万葉集』に記されています。今城は、もとは今城王といひ、臣籍降下して大原真人姓を名乗った人物でした。

「見とも飽かめや」とは対象を称える常套句であり、柿本人麻呂や笠金村らの天皇讚具現化した暮盤の目状の都が造営され、堀に囲まれた人工的な空間が出現したことで生まれた、奈良ならではの表現であったといわれています。(県立万葉文化館・井上さやか)

▲訳▼あしひきの幾重もの山奥に咲くはずの椿だから、つらつらといくら見ても飽きない。そのように見飽きない、これを植えたあなたは。

えられていたことから、讚歌に詠み込まれるにふさわしい植物でもありました。

植物を「植ゑる」ことを表現する歌は、奈良時代以前にはみられません。中央集権国家を